

リズム体操授業における音楽学習の方法論II

Methodology of music study in the rhythmical movement lessons at school II

伊野 義博*・高山 雄一**

I 目的

本稿は、直接的には先の研究「リズムカル・ムーブメントにおける音楽と動きの研究～音楽構成の理解と動きの変容との関係性～」¹⁾に続くものである。

現行の学習指導要領（体育・保健体育）では「体づくり運動」「表現運動」「ダンス」などの領域において、音楽を用いた学習が行われている。また、音楽と一体化して身体の動きを楽しむ「リズム体操」も学校の内外でさかんに行われるようになってきた。その際、音楽への理解や感受はより良い動きを生み出すためのきわめて重要な要因となると考えられるが、この点について先の研究においては、リズム体操の作品構成者や動きの実践者が、音楽を深く理解、聴取すると、その内面に以下の変化が見られることが明らかになった²⁾。

- ・音楽やリズム体操への積極的な気持ちが増す。
- ・音楽や動きに対するより細かで豊かなイメージを形成する。
- ・音楽の事実や変化を意識した動きをしようとする。
- ・音楽との関係において作品の問題点や課題が見えてくる。
- ・音楽構造の理解や感受を、作品の構成や動きに生かす。

今後、これらの成果を学校における授業の中で実現させていくことが望まれるが、本稿では、そのための一つの方法論を提示したい。すなわち、研究の趣旨を生かし、実際の小学校において実現可能な授業計画を立案し、実践として示すことである。

II 方法

授業は、平成17年6月、新潟県胎内市立中条小学校3年生を対象として計画、実践された。体育科と音楽科の教科横断的な方法をとる。それは、「各教科、道徳、特別活動を縦糸とし、それらに横糸を通して横断し、関連づけていく」³⁾学習で、教科の独自性を保ちながら相互の横のつながりも重視する取り組みである。具体的には、体育科における単元「リズム体操」と音楽科における題材「音楽と身体表現～音楽の感じを生かして身体表現しよう～」をつなげる。すなわち、体育科として6時間の「リズム体操」を実践する過程で1時間の音楽科の授業を取り入れ、「リズム体操」に用いられる楽曲を感じ取り身体表現する活動を組織していく。それぞれの教科のねらいを達成しつつ、「リズム体操」という一つの作品を完成させていくわけである。各教科の関係は、次のようになる。なお、今回の実践では、体育の授業を高山が、音楽の授業を伊野が実践した。

2005.11.30 受理

*新潟大学教育人間科学部, **胎内市立中条小学校

体育科：「リズム体操」(全6時間)						
1	○作品の動きを通して行う。					
2	○作品の動きについて、動き方や順序を覚える。					
3	○「胸の開閉と手たたき～腕あげと向き変えとび」について工夫をし、動きの質を高める。	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">音楽科：「音楽と身体表現」 (1時間)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td colspan="2">○音楽の感じを生かして身体表現をする。</td> </tr> </tbody> </table>	音楽科：「音楽と身体表現」 (1時間)		○音楽の感じを生かして身体表現をする。	
音楽科：「音楽と身体表現」 (1時間)						
○音楽の感じを生かして身体表現をする。						
4	○「左右振と左右回旋～かさまわり～前後交差振と回旋」について工夫をし、動きの質を高める。					
5	○中間発表会を行い、発表に向けてのめあてを立て、練習する。					
6	○発表会を行い、グループでよい動きになるように練習した成果を発表し合う。					

教材曲の「リズム体操」は、平成15～17年度文部省科学研究「感性教育のためのリズムカル・ムーブメント・プログラムの開発(研究代表者滝澤かほる)」において、開発されたリズム体操のための作品である。榎本暢子(新潟県体操研究会)構成、齋藤薫・猪又悦子・滝澤かほる(いずれも新潟県体操研究会)協力、そして森下修次(新潟大学)作曲によるもので、あらかじめ提示された体操の動きや構成に合わせて音楽が作られている。なお、教材曲についての詳細は、森下・榎本・滝澤による「リズム体操授業における音楽学習の方法論1」⁴⁾を参照されたい。

III 実際

まず、体育科の授業として、次の計画を立案した。

1 第3学年 体育科学習指導案(授業者：胎内市立中条小学校教諭 高山雄一)

1) 単元名 「リズム体操」

2) 単元の目標

- ・いろいろな動きを経験することにより、リズム体操の楽しさを味わうとともに、意欲的に自分の動きを高めよとする。【関心・意欲・態度】
- ・「よりよい動きのポイント」について考えることができる。【思考・判断】
- ・よりよい動きを身につけ、リズムカルに動くことができる。【技能】

3) 単元の構想

現在、「体力低下」や「運動をする者としなない者とがはっきりと分かれる二極化傾向」など、児童・生徒を取り巻く環境において、健康に関わる課題が山積している⁵⁾。現行の学習指導要領では、心身共に健全な発育・発達を促すために、心と体を一体としてとらえた指導が重要であるとされている⁶⁾。

リズム体操は世界的に行われ、生涯教育として心身の健康に成果をあげてきている。滝澤は、学校体育における体操の行われ方について、「いろいろな運動を経験し、からだの正しい使い方を練習するなかで、楽しみながら結果として総合的に体力がついてゆくような方法が有効である」と述べている⁷⁾。思いきり動き、運動そのものがもつ心地よさを多く味わわせ、音楽に合わせてリズムカルに動くということが主な課題となる単元を構成することが、本学級児童が総合的に体力を高め、運動を愛好していこうとする態度を育てるために効果的なものであると考え、本単元を設定した。

4) 学習内容の特性

(1) 一般的特性

滝澤は、リズム体操の具体的な内容・ねらいを「洗練されたよい動きを身につけ、基礎的なからだをつくることを目的とする。自然で全身的な動きをリズムカルに行うことが特色で、音楽と一体となって楽しく行う。」と述べている⁸⁾。一連の動きとして構成された、まとまりのある作品を通して、楽しみながら動きを

高め、からだをつくることができ、心とからだの統合をめざすとされている。

(2) 児童から見た特性

滝澤は、児童生徒にとっての体操の楽しさを、「よく動けるからだをつくるためにあるので、自己のからだに目を向けて動くことができ、からだをどのように動かせばどのように動きが変わり、体力の向上につながるのかが、実践を通してわかることや、十分に動いた後の爽快感が楽しさと捉えられる。」と述べている⁹⁾。記録の達成や、勝敗の有無による楽しさとは違い、思い切り動くことそのものもつ楽しさや心地よさを味わうことができる特性をもつ。

(3) 単元実施における留意すべき特性

板垣は、著書「体操論」¹⁰⁾の中で、「腕の振り方にもいろいろあるが、どのような動きがよいか、もっと別の振り方はないか、手具を持ったらどのような動きができるか、からだの他のどの部分の動きと組み合わせたらどうか、リズムを変化させたらどうか・・・などを考え、動きの可能性を引き出し、動きの質の向上を図ることが直接のねらいになってくる」と、授業における学びの重要性を指摘している。滝澤は、以下の点を、動きの質の向上における要素として挙げている¹¹⁾。この要素に沿った指導を行うことにより、「単に動く」というレベルから、「よりよく動き、総合的に体力を高める」というレベルに引き上げることができるものとする。児童には、「よいよい動きのポイント」として提示する。

＜よい動きの5原則＞

1. どういう動きなのか理解して動こう。(解釈)
2. しっかり伸びたりちぢんだりして大きく動こう。(運動空間)
3. 床を押す感じで動こう。(はずみ)
4. 腰 → 手・足のように動こう。(伝導)
5. 力を入れるところは入れて、力を抜くところは抜いて動こう。(緊張と解緊)

5) 単元について

(1) 教材

本単元では、学習教材として、平成15～17年度文部科学省研究費「感性教育のためのリズムカル・ムーブメント・プログラムの開発(研究代表者 滝澤かほる)」のために作成されたリズム体操作品を使用する。動きに合わせて音楽が作曲されており、小学生が、よりよい動きを身につけ、基礎的な体をつくるための教材である。

リズム体操作品(手具なし)

構成; 榎本暢子(新潟県体操研究会)

協力; 齋藤 薫, 猪又悦子, 滝澤かほる(新潟県体操研究会)

作曲; 森下 修次(新潟大学)

(2) 学習の進め方

学習の発展段階に合わせ、次のように学習を進める。基本的な動きを中心に発展させ、楽しみながら学習を進めることができるようにする¹²⁾。

- 1次(はじめ): リズム体操作品を「一連の動き」として経験し、動き方を覚えてできるようになる。
- 2次(なか): 自分の動きを見直し、どのようにしたらよりよく動けるかを考えながら練習に取り組み、動きの質を高める。
- 3次(まとめ): 学習の成果を相互に発表し合う活動を通して、よい動きに高めていくためにはいろいろな工夫があることを知る。

(3) 単元の構想

第1時間目は、ゲストティーチャー(作品構成者の榎本 暢子先生)を招いての指導を行う。単元の導入として、いくつかの動きを経験させ、児童の心を解きほぐしていく。楽しく動くことを通して、学習単元への期待感を高める。その後、ゲストティーチャーにより、教材となる作品を提示する。

その際、動き方や、よい動きのポイントをゲストティーチャーに解説してもらいながら、一連の動きとし

での経験をさせる。次時は、前時で学習した一連の動きの内容を確認し、ゲストティーチャーから教わったよい動きのポイントを確認しながら、動きの順序を覚えることを課題とする。

3, 4時間目には、動きの質を向上させることをねらいとする。ビデオ映像から、師範の動きと自分たちの動きを見比べることを通して、どのようにして動きをよくしていくかを考えさせる。グループ学習が中心となり、教師はグループの立てためあてに応じた支援をしていく。

5, 6時間目は、発表形式にする。前時までの練習し、グループごとに練習してきた成果を見合う活動を行わせる。グループや、個々の練習成果を認め合うことを通して、動きの質の高め方には様々なものがあることを学習する。

6) 指導計画 (全6時間)

次	時	主な学習内容 ○は学習内容・指導内容	学 習 活 動	評 価 規 準 ()は観点
1 はじめ	1	○学習内容についての関心をもち、作品の動きを通して行うことができる。 ・リズム体操について ・いろいろな動き ・作品の動き	○学習内容について説明を聞く。 ○ゲストティーチャーの指導により、いろいろな動きを経験する。 ○作品の動き(ゲストティーチャー)を見る。 ○ゲストティーチャーから、動き方や、よい動きのポイントについての説明を聞く。 ○一連の動きとして経験する。 ○学習のまとめ(記入, 発表)をする。 ・動きの感想 ・ふりかえり	○楽しそうに動いている。(関) ○一連の動きとして、通して動くことができる。(技) ○動きの感想を具体的に記述している。(関)
	2	○前時で学習した作品の動きについて、動き方や順序を覚える。 ・よい動きのポイント ・作品の動き ・グループ学習の進め方	○前時で教わったよい動きのポイントを確認, 提示する。 ○作品の動きの練習をする。 ○学習した動きを続けて行う練習をする。 ○グループごとにまとまって練習する。 ○学習のまとめ(記入, 発表)をする。	○動き方や順序を覚えている。(技) ○グループの仲間と仲良く練習している。(関) ○学習感想を具体的に記述している。(関) <カード>
2 なか	3	○「胸の開閉と手たたき〜腕あげと向き変えとび」について、よい動きにしていくための工夫をし、練習を通してグループごとに動きの質を高める。	○作品の動きを通してみる。 ○映像を見ながら教えていただいた「よい動きのポイント」を、復習する。 ○よい動きになるように意識しながら、グループごとに練習する。 ・動きについて話し合い ・動きの質を高めるための練習をする。 ○自分たちの動きを映像で見て、よい動きへ近づいているかを確認する。 ○学習したことに注意しながら、作品を通して動いてみる。 ○学習のまとめ(記入, 発表)をする。 ・動いた感想 ・ふりかえり	○「よい動きのポイント」に従って、自分の課題をもつことができる。(思) ○考えたことや、助言されたことを、自分の動きに生かしている。(技) ○協力して学習に取り組む。(関)

			○学習感想を具体的に記述している。 (関)
4	○「左右振と左右回旋～かさまわり～前後交差振と回旋」について、よい動きにしていくための工夫をし、練習を通してグループごとに動きの質を高める。	○作品の動きを通してみる。 ○映像を見ながら「よい動きのポイント」を、復習する。 ○よい動きになるように意識しながら、グループごとに練習する。 ・動きについて話し合い ・動きの質を高めるための練習をする。 ○自分たちの動きを映像で見て、よい動きへ近づいているかを確認する。 ○学習したことに注意しながら、作品を通して動いてみる。 ○学習のまとめ(記入, 発表)をする。 ・動いた感想 ・ふりかえり	○「よい動きのポイント」に従って、自分の課題をもつことができる。 (思) <学習カード> ○考えたことや、助言されたことを、自分の動きに生かしている。 (技) ○協力して学習に取り組む。 (関) ○学習感想を具体的に記述している。 (関)
3 まとめ	5 ○中間発表会を行い、発表に向けてのめあてを立て、練習する。 ・工夫ポイント	○一連の動きを確認する。 ○発表のねらいや、見方、手順についての説明を聞く。 ・相互評価の方法 ・記入方法 ・「よい動きのポイント」に従って練習した成果 ・評価の方法 ・発表の反省 ○前時までの学習をふり返り、グループで練習をしながら、「工夫ポイント」を決める。 ○中間発表をしてみる。兄弟グループ間で相互に評価し合う。 ○学習のまとめ(記入, 発表)をする。 ・動いた感想 ・ふりかえり	○協力して学習に取り組んでいる。 (関) ○グループ内での工夫ポイントを具体的に記述している。 (思) ○「工夫ポイント」に従って、自分の動きを高めている。 (技) ○グループのよさを具体的に記述している。 (思) ○学習感想を具体的に記述している。 (関)
6	○発表会を行い、グループでよい動きになるように練習した成果を発表し合い、自他のよさや、動きの質を高めることには多くの要素があることに気付く。 ・発表 ・相互評価	○一連の動きを確認する。 ○前時までの学習をふり返り、グループで練習する。 ○発表会を行い、相互に評価し合う。 ○学習のまとめ(記入, 発表)をする。 ・動いた感想 ・ふりかえり	○協力して学習に取り組む。 (関) ○自分の動きの質を高めている。 (技) ○見たグループの工夫ポイントについて、具体的によさを記述している。 (思) ○学習感想を具体的に記述している。 (関)

2 第3学年音楽科学習指導案（授業者：新潟大学教育人間科学部 伊野義博，胎内市立中条小学校教諭 高山雄一）

音楽科の授業は、次のようなものとなった。

1) 題材名

音楽と身体表現～音楽の感じを生かして身体表現しよう～

2) 学習指導目標

楽曲「リズム体操」(森下修次作曲)の音楽を感じ取って身体表現をする。

3) 教材

「リズム体操」(森下修次作曲)

4) 題材の流れと教材

本題材は体育科の単元「リズム体操～体ほぐし運動の領域から～」(前記体育科学習指導案)に呼応している。ここでは、音楽科の側面から、リズム体操で用いられる音楽の特徴を生かした身体表現をすることが目標となる。教材曲として「リズム体操」(森下修次作曲)を用い、楽曲の構成やリズム、旋律の流れ、拍子といった音楽の諸要素に注目し、その特徴を感じ取って聴いたり、体を動かしたりすることがねらいとなる。

曲は、大きくABA'の三部から成り、動きの形態に合わせ、8小節を基本単位として進んでいく3分程のピアノ曲である。A及びA'は、ホ長調4分の4拍子、♩=140のテンポで軽快な感じ、対して中間部分のBは、変ニ長調8分の6拍子、♩.=60のテンポで、優雅で流れるように演奏される。

授業は、新潟大学教育人間科学部音楽科学生のパianoによる実演を核に進められる。まず全体の演奏を聴き、曲が大きく三つの部分で構成されていることの学習から入る。そして、最初と最後の部分がほぼ同じで、中間部は異なったテンポ、調、旋律になっていることに気づかせ、それらに対するイメージの違いや変化を明確にしていく。

次に曲の細部に注目させる。具体的には、A(A')からは、5～12小節(63～70小節)及び29～32小節(87～90小節)、Bからは、37～44小節及び49～56小節の部分を選択する。これら四つの箇所は、いずれも音楽的特徴が顕著で、なおかつ動きとの密接な対応関係が期待される部分である。それぞれの箇所において、音楽的特徴を押さえ、イメージを持たせる。その後、これらを動きのパターンと連動させ、より美しい身体表現となるための工夫をさせたい(次表参照)。なお、本題材に要する時間は1時間である。

選 択 部 分 <拍子>	音 楽 的 特 徴 (楽譜参照)	予 想 さ れ る イ メ ー ジ (例)	動 きの パ タ ー ン	期 待 さ れ る 動 きの 様 相
5～12小節 (63～70小節) <4分の4拍子>	2小節を1単位とした4分音符と8分音符+8分音符の組み合わせ。♩=140のテンポ。スタッカートで演奏される。	軽い。軽快。楽しい。うれしい。わくわく。リズムカル。きざんだ。軽くジャンプ。	走ってホップ ・前へ4歩歩いて(1～4拍)、ホップ、ホップ(5～8拍)×2 ・同様に後ろへ×2	4分音符や後打ちのリズムの組み合わせを生かした、軽快な動きの表現。 ・くちざさみ ・手拍子 ・指揮 ・歩行・ホップ
29～32小節 (87～90小節) <4分の4拍子>	1～3拍目にかけて、低音から高音への跳躍。3～4拍目の2分音符の伸ばし。	低い所から高いところへ。重いものを上へ素早く持ち上げる。上方へ思い切り伸びる。ロケットの打ち上げ。	腕のばし ・左足を横に踏み出し左に倒し、右腕を上突き出す。(1～4拍)次に左右反対で。(5～8拍)×2	重心を下方にし、音高の跳躍と3～4拍目の2分音符の伸びを生かし、上方へ腕をまっすぐのびるように突き出す。 ・腕のばし

37～44小節 < 8分の6拍子 >	8分の6拍子, ♩ = 60 のテンポ。優雅な右手のメロディに流れるような16分音符の伴奏。	優雅。流れる。ゆったりと揺れた感じ。曲線や楕円や回転のイメージ。	左右振と左右回旋 ・左右振2回と左右回旋2回×2	拍子や旋律, 左手の伴奏を意識し, 腰からの動きを生かして流れるような手の振りや回旋をする。 ・左右振 ・左右回旋
49～56小節 < 8分の6拍子 >	高音で半音ずつ弾むような旋律進行。16分音符の細かな上下運動。	はずんだ大きな動き。膨らむ感じ。力を入れたり抜いたり。	前後交差振と左右回旋 ・前後交差振2回と左右回旋2回×2	旋律の勢いや16分音符の動きを感じた, はずんだ大きな動きをする。 ・前後交差振 ・左右回旋

5) 評価規準

(1) 題材の評価規準

ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能	エ 鑑賞の能力
・楽曲「リズム体操」の音楽を感じ取って進んで身体表現をしようとする。	・楽曲「リズム体操」の音楽を感じ取って身体表現の工夫をする。	・楽曲「リズム体操」の音楽の特徴を生かした身体表現をすることができる。	・楽曲「リズム体操」の構成に気を付けて曲の全体を聴く。

(2) 学習活動における具体的評価規準

ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能	エ 鑑賞の能力
①三つの部分(ABA')の特徴を聴き取ろうとしている。 ②選択部分の音楽の特徴を生かし, 進んで身体表現をしようとしている。	①三つの部分(ABA')の特徴を感じ取っている。 ②選択部分における音楽の特徴を感じ取って身体表現を工夫している。	①選択部分の音楽の特徴を生かした身体表現ができる。	①三つの部分(ABA')の構成に気を付けて全体を聴きとっている。

6) 本時

(1) 本時の目標

- ・三つの部分のそれぞれの特徴や全体の構成を感じ取って聴く。
- ・選択部分(5～12小節, 29～32小節, 37～44小節, 49～56小節)の音楽の特徴を生かして身体表現する。

(2) 展開

学 習 内 容	教 師 の 働 き か け	児 童 の 活 動	評 価
(1)楽曲の全体把握・A B A'の区切り・それぞれの音楽とイメージの共通点, 相違点	○楽曲を通して聴かせる。 ○全体が三つの部分で構成されていることに気づかせるとともに, それぞれのイメージを感じ取らせる。	○ピアノ演奏を聴き, 曲が, 大きくいくつの部分に分かれるか捉える。 ○それぞれのイメージを学習プリントに書き込むとともに発表し, 意見交換をする。	アー① (観察) イー① エー① (学習プリント) (発言)
(2)5~12小節の音楽的特徴とイメージの把握 (イメージ: 軽い。楽しい。わくわくする。軽くジャンプする感じ。)	○5~12小節を演奏し, 音楽的特徴・イメージを捉えさせる。 ・演奏の仕方(ピアニストの指の動き)に注目させる。 ・ピアニストの動きをまねさせる。 ・手拍子や指揮をさせ, 曲の感じをつかませる。	○5~12小節の部分のテンポ, 演奏の仕方をヒントに音楽の特徴をイメージとともにつかむ。 ・旋律を口ずさんだり, ピアニストの指の動きをまねたり, 手拍子をしたりして, 曲の感じをつかむ。 ・どんな感じがしたか発表する。	アー② (口ずさみ, 手拍子, 指揮などの観察)
(3)29~32小節の音楽的特徴とイメージの把握, 身体表現 (イメージ: 低いところから高いところへ大きな階段を上る感じ。ロケットの打ち上げ。) (身体表現: 腰を落とす。音楽によって上方へ腕をまっすぐ伸ばす。)	○29~32小節を演奏し, 音楽的特徴・イメージを把握させる。 ・跳躍進行, 2分音符に注目させる。 ○「腕のぼし」の表現を工夫させる。 ・イメージを整理し, 「腕のぼし」の表現に生かすことができるようにする。 ・音楽に合わせて, 教師と一緒に表現させる。	○29~32小節の部分の跳躍進行, 2分音符の伸びをヒントにイメージをつかむ。 ・演奏を聴いて, 曲の感じについて意見交換する。 ○曲の感じを生かして, 「腕のぼし」の表現を工夫する。 ・音楽に合わせて「腕のぼし」を繰り返す, 良い表現を工夫する。 ・意見交換したイメージを生かして, 「腕のぼし」をするには, どうしたらよいか, 考え, 発表する。	イー② (発言) (「腕のぼし」の表現の工夫, 意見交換の様子を観察)
(4)37~44小節の音楽を生かした左右振・左右回旋の表現 (イメージ: 優雅。流れる。ゆったりと揺れた感じ。曲線や楕円, 回転。) (身体表現: 腰からだんだんに動く。流れるような手の動き。)	○37~44小節を演奏して曲の特徴を掴ませ, 音楽を生かした左右振, 左右回旋の工夫をさせる。 ・拍子, 旋律, 左手の伴奏に注目させる。 ・音楽と動きとの関係に注意させて発言を促す。 ・腰からの動きをポイントにさせる。 ・様子を見て演奏をし, 音楽と合わせた表現をさせる。	○37~44小節を聴いて曲の特徴を感じ取り, それを生かして左右振, 左右回旋の表現を工夫する。 ・イメージを発表してまとめる。 ・グループに分かれて, 表現を工夫する。 ・音楽に合わせた表現→工夫の話し合いを繰り返す。 ・学習プリントに記録する。	ウー① (表現の様子を観察) (発表) イー② (学習プリント)
(5)49~56小節の音楽を生かした前後交差振と左右回旋 (イメージ: はずんだ大きな動き。膨らむ感じ。力を入れたり抜いたり。) (身体表現: 旋律の勢いや16分音符の動きを感じた, 弾んだ大きな表現。)	○49~56小節を演奏して曲の特徴を掴ませ, 音楽を生かした前後交差振と左右回旋の工夫をさせる。 ・旋律のはずみや16分音符の動きに注目させる。 ・音楽に合わせた表現を繰り返し, 工夫させる。 ・グループ毎に練習させる。 ・いくつかのグループの表現と工夫について発表させる。	○49~56小節を聴いて曲の特徴を感じ取り, それを生かして前後交差振・左右回旋の表現を工夫する。 ・イメージを発表してまとめる。 ・グループに分かれて, 練習を繰り返す, よりよい表現になるように工夫する。 ・どのような工夫が必要だったか, 音楽との関係からまとめる。 ・学習プリントに記録する。	ウー① (表現の様子を観察) (発表) イー② (学習プリント)

IV 考察

音楽の授業を取り入れたことにより、児童の動きに次のような変容が見られた。

- ・動きが全体的になめらかになった。

音楽学習以前の児童の動きには、運動の「形」や「手順」を忠実に表現しようとする傾向が見られたが、音楽の学習をすることにより、いっそうなめらかな動きができるようになった。これは、用いる音楽の特徴を深く感じ取ることにより生じた結果だと考えられる。

例えば、37～44小節では、優雅な右手のメロディに流れるような16分音符の伴奏を感じ取り、腰からの動きを生かして流れるような手の振り（左右振）や回旋をする児童が多くなった。音楽の持つエネルギーや微妙な拍の伸縮、旋律の流れを身体全体で感じ、それらを運動の弛緩や緊張の連続として直接的に表現する姿を見ることができた。

- ・音楽と身体とが呼応・融合したより質の高い「リズム体操」の表現を指向しはじめた。

身体を音楽に寄り添わせ、身体を音楽と呼びさせることにより、動きの質の高まりが見られた。具体的には、29～32小節では、1～3拍目にかけて、低音から高音への跳躍、3～4拍目の2分音符の伸ばしといった音楽の動きや勢いを感じ取り、重心を下方にし、音高の跳躍と3～4拍目の2分音符の伸びを生かし、上方へ腕をまっすぐにのびるように突き出す表現へ変換していく姿を見て取ることができた。音楽の内的なエネルギーが身体と融合し、リズム体操が本来的に求める表現に近づいてきたように感じた。

V 今後の課題

今回の実践は、音楽学習の時間がわずか1時間であったこと、対象が小学校3年生であったことなどから、授業を受けた児童の変容がわずかであり、しかも客観的なデータとして効果を示すことができなかった。今後、高学年や中学生など、より高年齢の児童生徒を対象として音楽の感受、理解をいっそう深める授業を継続、実践していきたい。また、授業の方法も教科横断的な学習だけではなく、様々なやり方を試行する必要がある。

なお、本研究は、科学研究補助金（代表：滝澤かほる、課題番号：15300211、研究課題名「感性教育のためのリズムカル・ムーブメント・プログラムの開発」）による成果の一部である。

注

- 1) 伊野義博, 森下修次, 田中孝治, 滝澤かほる, 坂下玲子, 菅家礼子「リズムカル・ムーブメントにおける音楽と動きの研究～音楽構成の理解と動きの変容との関係性～」『新潟大学教育人間科学部紀要 第7巻第1号』 pp.85-97 2004
- 2) 前掲書p.90
- 3) 児島邦宏「教育課程改訂と横断的・総合的学習」『実践 クロスカリキュラムー横断的・総合的学習の実現に向けて』図書文化 p.26 1996
- 4) 森下修次, 榎本暢子, 滝澤かほる「リズム体操授業における音楽学習の方法論I」『新潟大学教育人間科学部紀要 第8巻第2号』 pp.193-204 2006
- 5) 中央教育審議会第一次答申 1996
- 6) 文部省『小学校学習指導要領解説 体育編』 p.12 東山書房 1999
- 7) 滝澤かほる編著『体操の学習指導』 p.14 不昧堂 1997
- 8) 滝澤かほる編著『体操の学習指導』 p.21 不昧堂 1997
- 9) 滝澤かほる編著『体操の学習指導』 p.45 不昧堂 1997
- 10) 板垣了平著『体操論』アイオーエム 1990
- 11) 滝澤かほる編著『体操の学習指導』 p.17 不昧堂 1997
- 12) 滝澤かほる編著『体操の学習指導』 1997 不昧堂